

【一般口演3】 第11席

“奇経八脈”の行方

宮城 伊藤 真佐子

奇経とは、経脈の一部をなすもので、任脈・督脈・衝脈・帯脈・陽維脈・陰維脈・陽蹻脈・陰蹻脈の八種がある。奇経についての記載は、早くは『黄帝内経』に散見するが“奇経”という語は見えず、『難経』に至って初めて“奇経八脈”として総括される。その後『脈経』では診断論が加わり、『黄帝内経』や『難経』の諸注釈によって種々の発展を見た。また、『聖濟総録』以降、正経とは独立した形で取り上げられ『奇経八脈攷』に至って一応の完成を見るとされている。

『難経』二十七難には「聖人図設溝渠。通利水道。以備不然。天雨降下。溝渠溢滿。当此之時。霧霈妄行。聖人不能復図也。此絡脈滿溢。諸経不能復拘也」とあり、正経と奇経の関連を説明している。これを受けて『聖濟総録』巻百九十二・鍼灸門・奇経八脈では「脈有奇常。十二経者常脈也。奇経八脈即不拘於常。故謂之奇経。蓋以人之気血常行於十二経脈。其諸経滿溢。即流入奇経也」と記している。奇経とはあくまで正経の予備的・補助的な役割を担うのみであり、通常の治療において必要とされるものではないことになる。そうした認識からか、奇経八脈の正確な把握はなされておらず、奇経八脈についての理解は一面的で、その評価は決して高いものではない。しかし一方、“大周天”“小周天”に見られるような養生法において、奇経の果たしてきた役割は大きい。この両面を理解しなければ、奇経の真の姿は分からないはずであるが、現在検討はほとんどなされていないのである。

本発表では、『難経』の注釈書を基礎とし、後代の幾つかの文献を比較検討することによって、奇経八脈の発展過程と新たな今日的意義とを見いだす糸口を探るものである。